

# 『李陵』小考

— その本質と成立について —

藤村 猛

はじめに

中島の代表作と目されている『李陵』（昭和十七年十一月頃完成）は、色々な点で彼の作品の中で、最も良いものの一つと思われる。だが、欠点がない訳ではない。一例を挙げると、この作品の中心となるべきものが明瞭ではなく、作品が「割れている」<sup>註(1)</sup>様に感じられる点がある。換言すれば、この作品の主人公は誰かという疑問も生じるのである。事実、『李陵』の構成を見ると、一・三章が李陵を中心とし、二章は司馬遷を中心としていて、誰が主人公か、判断し難い。が、この構成には作者の意図があつた様に考えられる。

本稿では、かくの如き構成を取っている事によって生じる効果を考察し、そこから『李陵』の本質を探り、延いては、『李陵』の成立過程と絡み合わせて、この作品に込めた作者、中島の意図を明らかにしたい。

一

『李陵』の構成を、より明らかにさせる一つの手掛りとして、主要登場人物達の作中での関係と役割を見る方法がある。主要登場人物は三人に限定する事ができる。李陵、司馬遷、蘇武である。

彼らの関係を考えてみると、李陵と蘇武という組合せだけが精神的及び物理的關係を持ち、他の組合せの場合には確固とした関係は見当たらない。とすると、李陵と蘇武を軸にして、この作品が出来上がっているのかと言うと、そうではない。李陵と蘇武が軸になっているのは、僅かに三章だけである。しかも、蘇武は三章のみ登場し、又、中心的人物（主人公）として自立している訳でもない。彼が中心的人物たりえない理由は次のとおりである。

先ず第一に、蘇武の描写は李陵や司馬遷と比べると量的に少なく、彼の経歴や、彼を襲う有名な事件の詳細等を、作者は、「餘りにも有名だから、茲に述べない」といふ風に、筆を省略している事である。

次に、蘇武に関する殆どの描写が、李陵の視点を通してのものであり、蘇武の内面描写もない。つまり、彼は李陵によって眺められる存在だという事である。

三番目に、描写の力点が蘇武そのものの描写よりも、蘇武に接して揺れる李陵の想念の方にある事である。

以上の様に、結局の所、蘇武は李陵抜きでは存在し得ないし、李陵の中に取り込まれていて、自立した存在とは言いがたい。それでは彼の役割とは何かと言うと、李陵の周囲にあって、李陵に精神的な

影響を与える一人物という事にならう。例えば、匈奴の单干と同じ役割を持っていると考えて良いのではないか。李陵は彼らと出会い、精神的に成長（もしくは変化）していく。これが『李陵』の三章の概略ではなからうか。

この見方を一歩進めて、『李陵』の二章を除外して、一章と三章を除外して考えてみると、これは、李陵の「遍歴」を描写した、一種の「李陵の物語」と見做す事ができる。一章では李陵を外から描き、三章では彼の内面をも描写している。人間の生（遍歴）を内外から描いていく、この描写法は、中島のそれまでの作品、『弟子』（昭和十七年六月完成）の子路や、『わが西遊記』の悟浄の場合と同様である。李陵を、『悟浄歎異』における悟空的存在（行動者）と悟浄的存在（懷疑家）の混合体と見做す事もできる。が、両者が李陵の内部で対立しているのではない。彼は行動者でもあり、懷疑家でもありうる。この様な李陵が遍歴中に会おう人物として、单干や蘇武が存在しているのである。蘇武の持つ「純粹さ」と高い知名度の為に、李陵が蘇武を見ると同じ様に過大視してはならない。

一・三章を李陵の物語とすると、残る二章は何か。司馬遷の物語である。李陵と質量（量は李陵のものに比べると少ないが、全体の凡そ三分の一を占めている。）共に対等でありうるのは司馬遷である。李陵と司馬遷がこの作品の中心的人物（主人公）として自立して在る。

構成としては、李陵の物語に司馬遷の物語が、割り込んでいる事になる。（これには、『李陵』の成立過程が関連しているので、詳しくは後述したい。）

それでは、李陵と司馬遷の関係とは何か。前述した様に、彼らに

は確固とした関係はない。僅かに両者は、「李陵の禍」で繋がっているだけであり、物理的かつ精神的接触は殆どない。だが、単にバラバラというわけでもあるまい。仮にそうならば、『李陵』は失敗作に過ぎないだろう。「何か」が両者を繋ぎ留めているのである。それこそ、『李陵』の本質を形成するものと言ってよいだろう。

## 二

李陵と司馬遷の両者の性格や環境、それらを引っ括めて、彼らの生には明らかな相似と相違がある。それらの存在によって、李陵達は共通的であり、対比的でもある。この二重構造が、作中の二人の主人公の存在と共に、『李陵』の特徴となる。

だが、この構造は大方の人間関係の場合に当て嵌まらうし、各々の持つエネルギーの強さと相互の緊張関係がなければ弛緩してしまう。彼らの相似とは、性格や環境、及び、運命の非情さ等の相似である。彼らの性格は、大体において「女々しい」ものではなく、節義を重んじる男らしいものである。彼らの「男」意識と、非業の死を遂げた父祖への思いを含む、名を上げようとする名誉心や、自己の能力や存在への自信が、彼らを北征や李陵の弁護へと導く。だが、その選択の結果は、敗戦、族滅、そして宮刑である。これらの非情な結果は、彼らを混乱の内に陥れる。この混乱の中で、李陵は「売国奴」に、司馬遷は「書写機械」に変身する。そして、彼らは自分が「男（又は士）」である事に自信が持てなくなり、己の行為や存在を恥と思うようになる。

しかし、彼らのその後の生き方は、軟弱な女々しいものではない。司馬遷は、「悪黨」にでも取り憑かれてゐるやうなすさまじい、

(注、傍点は原文)を身に付け、李陵は、帰漢を拒否し、匈奴で死のうとしている。彼らは自己の「男」らしさを証明しようとしているかのようである。

選択、挫折、喪失、そして自己回復運動、これが彼らの生のパターンである。

以上が、彼らの主な相似点であるが、相違は彼らの仕事への執着の差、そして、それによって生じる、己が没入できる仕事の有無である。見方を変えれば、喪失したものと仕事との価値観の差である。

李陵は、族滅への怒りから漢を裏切り、それまでの親子代々の職と言ってよい「漢の武將」を捨てた。彼にとって、祖国愛よりも家族への愛が勝っていた為である。これに対して、司馬遷は、宮刑によって失った「男」としての誇りよりも、修史の仕事を重く見て、自殺せずにひたすら仕事に生きる。彼の心は、時に襲う恥の意識は別として、「表現することの欲び」を得る等、修史の仕事に占められている。が、李陵は、亡き家族への思いや望郷の念等によって、空虚で不安定な希望のない生活を送る。

これが、彼らの生の相似と相違である。これらが、前述した様に、両者を共通的にすると共に、対照的にもしている。換言すれば、相似と相違は両者を引き立て合ったり、相対化したりして、両者の生を鮮明にしている。

そして、彼ら自身や彼らの関係に緊張感を与えているのは、彼らの相似や相違の大きな特徴である「生の非日常性」である。それは、異常な事件と彼らの「男」意識によって形成されている。そこから出てくるのは、孤独感や屈辱感に代表される、彼らの苦悩である。彼らの相似や相違は、結果として、彼らの苦悩を浮き出させて

いる。

彼らの苦悩は何処まで深刻であらうか。それは彼らの状態や行動を見れば分かる。李陵は売国奴として匈奴で死のうとし、司馬遷は「書写機械」として生きる。だが、その変身は完全ではなく、中途半端である。彼らは、孤立し、恥の意識に付き纏われていて、忘れる事も逃れる事もできない苦しみの中にいる。これは、彼らの性格——生真面目さ——や事件の異常さにもよるが、苦悩は死ぬまで続くのである。やはり、彼らの苦悩は「ほんもの」だろう。

ここで、彼らの苦悩が、単に『李陵』の原典たる『漢書』や『任少卿に報ずる書』の翻訳であるのか、それとも、作者、中島の独創によるのかを知る為、原典と『李陵』の主な違いを捜してみると、次の様な点があろう。

。 李陵の蘇武への降服勧告の有無  
(『漢書』では、李陵が、蘇武に降服を勧告したり、蘇武の妻が去った事を知らせたりしている。「何も今更そんな勧告によって蘇武をも自分を辱しめるには當らない」(『李陵』)と、李陵は思ったりしていない。)

。 司馬遷の宮刑直後の混乱の有無  
(『任少卿に報ずる書』には、「是を以て極刑に就けども慍色なし。」と意外に冷静である。)

以上が事実の違いであり、以下は中島の想像によって付け加えられた独創部分である。

。 李陵の族滅への怒りと蘇武への負い目

(蘇武の李陵への憐愍やそれを恐れる李陵の心情、そして自己懷疑は『漢書』にはない。)

。司馬遷の官刑後の苦惱と「すさまじさ」

(「唯、『我在り』といふ事實だけが悪かつたのである」という結論に至る思索も、悪霊にでも取り憑かれたような「すさまじさ」も、『任少卿に報ずる書』にはない。)

いずれも、李陵達の苦惱の核となるものや、彼らの苦惱を助長する生真面目さを表わすものである。中島が作中の主人公達の苦惱の多くを、意識して創造した事がこれで判明する。つまり、李陵達の苦惱の多くは、原典の翻訳ではなく、中島の独創なのである。

これらの改作や独創の傾向(主人公の苦惱を増加させる傾向)は、中島の他の作品(『山月記』)にも見られるが、『李陵』では一人ではなく、二人に意識的操作用が行なわれている。

この操作は、両者を同じ色(苦惱)に染め、かつ、各自の存在感を増す効果を持つ。そして、その結果として、この操作は苦惱を中介として両者を結び付け、主人公達の苦惱に満ちた生を印象づける。つまり、両者の相似や相違に見られる非日常性の苦惱は、作者の意識的操作によって生じており、作品の内から見ても、外から見ても、苦惱が作品の中心的感情となっているのが分かる。即ち、苦惱が両者を繋ぎ留める重要な要素なのである。

これと、前述の相似、相違の相互作用の二つが絡み合う時、李陵達の生は、バラバラではなく、共存し、「苦惱の生」のバリエーションとなる。

だが、その両者の間にあるバリエーションや緊張はそれほど強いものではない。例えば、『弟子』の子路と孔子の様に、緊張した関係ではない。そして、苦惱の深化は二人を結びつけると同時に、作品世界を息苦しくさせている。彼らの恥に拘泥し過ぎていた様な生

真面目さ——例えば、李陵の蘇武への過度な負い目や司馬遷の「すさまじさ」——によって、彼らの生の可能性——例えば、李陵の匈奴の武將としての完全な変身や、司馬遷の修史の仕事への高揚たる自覚(「僕誠に已に此書を著し、之を名山に蔵め、之を其人通邑大都に傳へば、則僕前辱の責を償ひ、萬歳せらるると雖も豈悔あらんや。」「任少卿に報ずる書」)によって生じる生の可能性——の限定(狭小)化がある。

これらのマイナスとも思える現象には、やはり、作者、中島の『李陵』創作の意図が働いているに違いない。『李陵』の成立過程と絡み合わせて考えてみる必要がある。

### 三

『李陵』という題名は、周知の通り、中島自身が付けたものではなく、彼の死後に深田久弥が命名したものである。中島は『李陵』の草稿、原稿に題名を付けていない。(以下、題名は付いていなくても、便宜上、その草稿や原稿を『李陵』の草稿、原稿と呼ぶ。)彼が『李陵』に何と名付けようとしたのか、不明であるが、題名に関して二つのメモを残している。昭和十七年五月頃のものと同年九月頃のものである。(以下、前者を五月のメモ、後者を九月のメモと呼ぶ。)前者には「漢北悲歌」とあり、後者には「漢北悲歌」が斜線で消され、「李陵・司馬遷」とある。これを手掛りに『李陵』の成立過程を考える事ができる。

五月のメモには、中島がその頃、これから書こうと予定していたらしい作品名が列挙されている。それらは、執筆の前段階の素材への興味程度であろう。現在、それらの内でどんな作品か、判明する

のは、「子路（『弟子』）」「吃公子（『韓非傳』）」「漢北悲歌（『李陵』）」である。

ここで注目されるのは、メモ中の五つの材料の中から、「子路（『弟子』）」が最初に執筆された事である。

『弟子』は色々な面で、それまでの中島の作品とは異なっている。南洋行（昭和十六年六月—翌年三月）前の作品の中で、主人公に憧憬されていた行動者が、『弟子』で子路という主人公になり、作中で彼は思う存分に生き、『光と風と夢』（昭和十五年十二月頃完成か）で少し頭を出した「倫理観」が前面に登場し、主人公の行動原理となる。又、作中に描かれる人間関係も、『山月記』に代表される孤独から、孔子と子路という師弟関係に見られる様な連帯へと交わる。

この変化は、帰する所、太平洋戦争突入という時代変化と、それ以上に、中島自身の変化による。つまり、彼が体験した南洋行と作家として世に出た事（注）とが、彼の変化の主因であろう。

中島は、それまでの教師という、ある面では閉じられた世界から、南洋という、当時では時代の流れを感じて異境で、八カ月も暮らしたのである。望郷の念に代表される孤独も、作家たらんとする焦りも、南洋の熱気や病気に触まれる体への不安も、本土への帰国と共に消滅し、彼の望んでいた状態——家族と共に暮らし、作家として世に出る——になる。異境で生きた自信と、回復の喜び、そして、未来への希望が、『弟子』の世界の創造に関与したのと思われる。それほど、『弟子』は『古譚』や『古俗』の世界と離れている。

これに対して、九月のメモは、中央公論社から出版予定の作品集

に収録する積りの作品名を列挙している。

「弟子（子路）」

64

吃公子（韓非傳）」

64

李陵・司馬遷

64

（以下略）」

『弟子』は既に完成し、残りの長編二作も五月の頃と比べ、分量もある程度予定され、構想も進んでいたものと思われる。このメモでは、五月のメモと比べて、次の三点が問題になる。

。『李陵』（「漢北悲歌」「李陵・司馬遷」）が、五月のメモの中から選ばれ、九月でも執筆の対象となっている理由。

。題名の上での司馬遷が李陵と対等になった、即ち、司馬遷が『李陵』（「漢北悲歌」）の中で重きをなしてきた理由。

。『李陵』が『吃公子』より先に執筆された理由。

これらの疑問を解決していく事が、『李陵』の成立過程や中島の創作意図を、ある程度明らかにしよう。

#### 四

始めに、『李陵』が五月に「漢北悲歌」として登場し、九月にも、『李陵・司馬遷』という風に、中島の創作対象に入っている理由から考えてみたい。

五月の時点では、『李陵』は「漢北悲歌」として、李陵中心の、司馬遷は登場しても傍役の物語であつたらう事が推定される。この時点では、中島の「李陵」に対する心情はそれほど強いものではなく（もし強ければ、『弟子』の代わりに『李陵』が書かれたらう）、多分、李陵の運命に興味や共感を持った程度であらう。「漢北悲歌」

という題名の付け方によって、中島の興味や共感が何処にあったのかを想像する事ができる。李陵の望郷の念、家族喪失の悲しみ、これらが中島の南洋での思いと二重映しになつたくらいであらう。

六月からの中島はと言うと、彼は、『弟子』の成功により、作家として自立し、「上機嫌<sup>注四</sup>」に夏を迎える。この夏に書かれた新作としては、「南洋もの」(『南島譚』)がある。だが、「南洋もの」は、彼にとつて、「餘りの酷さに我乍らいやになつて了」い、「少しも自信の無い<sup>注四</sup>」ものだったらしい。

この当時の彼の文学観や文藝者観は、少し時期はずれるが、『李陵』執筆とほぼ同じ頃に書かれた『章魚木の下で』に表われている。そこで彼は、「ほんもの」を書きたい、そして、「何か實際の反に立ちたい」という二つの願望を表明している。<sup>注四</sup>

夏時分の「酷い」ものから、「ほんもの」を書くこととして、彼は中島の古典に取材した作品(『吃公子』『李陵』)を考える。彼の思う「ほんもの」とは何か。「思考忌避性といつたやうなものへの、一種の防腐剤として」(『章魚木の下で』)の「效用」を持つ作品、つまり、読者に考えさせる作品であり、「文學的なもの」に「醗酵」している作品である。

『李陵』には確かに、考えさせる要素が多分にあるし、作中で主、公還も考えている。中島の作品の主人公達には「考える者」が多いか、『李陵』の主人公達は南洋行前の作品の主人公達(『山月記』の李徴や『悟浄出世』の悟浄)と比べると、観念過剰を脱し、「現実(生活)」に生きる大人になってきている。これもやはり、中島の成長や「ほんもの」志向による。

同様に、南洋行後の『弟子』以降の作品の雰囲気や主人公の状態

を見てみると、少しずつ変化しているのが分かる。例えば、作中に描かれている行動者像と人間関係の二点に注目してみると、『弟子』、『名人伝』(昭和十七年九月頃完成か)、そして『李陵』へと通じる流れの傾向が分かる。

行動者像に焦点を当ててみると、思う存分に行動する幸福な行動者(子路)が、最後には無為者(『名人伝』の紀昌)に変化し、『李陵』では挫折する行動者になる。同様に、人間関係を見てみると、理想的な師弟関係(『弟子』)が、精神的な繋がりも失う兆しを持ち(『名人伝』)、『李陵』では、各人が孤立し、他者との連帯はない。

この変化の理由を、中島の文学への要求(「ほんもの」志向)によるとするだけでは、納得し難い点がある。何故ならば、『弟子』も『李陵』に劣らず、「ほんもの」の文学と思われるからである。別に、作者の側に二つの理由が推定できる。それは時代と本人の状況悪化である。具体的に言えば、戦争の悪化と、中島の持病である喘息の悪化である。

中島はこの年、何時もの年以上に冬の到来を恐れる。<sup>注四</sup>戦争への不安と喘息の発作が、彼を襲っている。彼の心の奥底で、「死」や「孤独」が彷徨し始めたとしても不思議はないし、「実務」に就くなど、この体では夢だという思いが胚胎しても不自然ではない。だが、同じ不安に苦しんでも南洋行前と違う点は、作家としての自信と生活人(家庭人)としての意欲を、彼が持っている事である。

中島は、死(十二月四日)の少し前までは、中国旅行を予定したりして、元氣であるが、彼の心情が単純に元氣であったとは思われない。彼のこの当時の氣分に相応しい作品として、『李陵』は考えら

れる。不安に苦しむ者は、苦惱する者を求める。一種の連帯感であり、カタルシスである。この時期に李陵（そして、司馬遷）に対する中島の思いが拡大しても不思議ではない。その拡大は、一章の外からの描写と共に、三章の内面描写の共存にも表われている。そこには、南洋行まで書き得なかった、主人公を襲う事件と感情の見事な融合が見られる。

## 五

次に、司馬遷浮上の理由を考えてみたい。先ず思い付くのは、中島と司馬遷が共に作家だという事である。「ほんもの」を書く作家として、司馬遷は偉大な存在である。しかも、彼は大きなハンディ（宮刑）を持っている。中島の描く作家の殆どが、何らかのハンディを持ち、かつ、不幸な境遇である点を想起すれば、司馬遷が中島の作品に登場してきた事も、ある程度頷ける。ハンディや不幸な境遇は、中島の自分に近づけた好みであろう。だが、何故、この時期に司馬遷なのか。前述の苦惱する者を求めるという中島の欲求によるとしても、それは李陵一人で良いのではないか。李陵の持っている司馬遷の何かに、中島は惹かれたに違いない。

司馬遷には、李徴（『山月記』）やステイヴンソン（『光と風と夢』）に見られた様な、中島の直接的な面影はない。だが、中島との近さは何処となく感じられる。それを明らかにする為には、『李陵』と原典の一つである『任少卿に報ずる書』との距離を見るのが適当だろう。

『李陵』の司馬遷の独自性は、宮刑後の混乱下の思索と、書写機械としての「すさまじさ」、そして、「表現することの欲び」等であ

る。

宮刑後の思索の結論は、不条理な事件に対して、「強ひていへば、唯、『我在り』といふ事實だけが悪かつたのである。」というものである。私的感情を超えて、すべての責任を自己が取る。この結論に至るまでの過程は、観念的であるが、司馬遷の苦悩を印象づける。彼の結論（覚悟と言ってよい）は、歴史家としての現実重視によるものであると共に、彼に顕著な「男」意識による。中島はこの覚悟に惹かれたのではないか。司馬遷のこの覚悟こそ、中島の欲していたものではなからうか。「冬の時代」を生き抜く為には、かくの如き覚悟は不可欠であろう。

同様に注目されるのが、司馬遷の「すさまじさ」である。中島の描く作家は皆、何かに取り憑かれた様に、創作に励んでいるが、司馬遷の「すさまじさ」に対抗できそうなのは、虎に変身した李徴くらいであろう。

中島は司馬遷の「すさまじさ」を、例えば、『悟浄歎異』で悟浄が悟空を充実した者として、又、『光と風と夢』でステイヴンソンを中島が大成した作家として憧憬したように、ある面では作家の理想的な一典型として眺めているのではなからうか。かつて、中島が喘息に苦しんだ時、正岡子規と自己を比べて、「自分などまだまだ」と自己を叱咤したように、中島は司馬遷の「すさまじさ」を模範としたのではないか。

三番目の「表現することの欲び」も中島自身の経験から生じたものと言って良からう。「生きることの欲び」を失っても、「表現することの欲び」は残る。ステイヴンソンも感じたこの欲びは作家の特権であり、病身の中島には切実な意味を持っていよう。これ

は、やがて身動きできなくなる彼にとつて、予言でもあり慰めである。

以上の様に、『李陵』の司馬遷の独自性は、中島にとつて、病氣や不安に耐える為に必要なものであり、彼の思いの投影でもあろう。

この中島の司馬遷への思い以外の、司馬遷浮上の理由としては、『李陵』の構成上の作品世界の深化という欲求が考えられないだろうか。仮に、『李陵』の主人公が李陵一人であつたとしたら、作品は統一される代わりに、平板になってしまう恐れがありはしないだろうか。『弟子』の子路に対する孔子の役目を蘇武がある程度、果たしているとはいへ、蘇武では、生き方は美しくとも、単純すぎる。つまり、蘇武では、李陵の苦悩を深める役目を果たしても、苦悩する人間ではなく、苦悩のバリエーションは生じない。作品にもつと考える(苦悩する)人間が必要となってくる。司馬遷登場の理由である。司馬遷と李陵が絡み合つて作品が成立すれば、万万歳なのである。確かに、司馬遷浮上は危険な賭けである。が「ほんもの」志向と同じ作家としての夢の為に、中島はそれに踏み切る。

## 六

九月のメモに関する第三の疑問に移ろう。何故、『李陵』が『吃公子』を押し退けて、先に執筆されたのだろうか。因みに、両者共、十月中旬までにはある程度の構想や、断片的な下書きの段階に入ったものと思われる。

『吃公子』と『李陵』の執筆順序が逆転した事は、さほど意味がないようにも思われる。が、この時期(昭和十七年十月頃)の中島には、意味があつたものと思われる。乱暴な言い方をすれば、この

時期の中島には明日をも知れぬ作家生活と、感じられていたのではない。病氣や戦争によつて、明日、作品が書けるという保障は何処にもないのである。今日、書かなければ何時書けるのか。中島の創作意欲を、この様な思いが刺激したろう事は容易に想像できる。中島は書きたいものから書いたろう。であるから、執筆の順序は意味を持つてくるのである。

現在、『吃公子』は執筆の前段階の断片的なメモしか残されておらず、そのメモから想像すると、『吃公子』には次の様な特徴があつたろうと思われる。

。『吃公子』の主人公、韓非子の持つ醒めた人間観  
。韓非子の吃りの苦悩

韓非子のものである人間観は、彼が法家の代表者であるという史実から見ても適當であるが、この考え方は司馬遷のものと似ている。

「卑しい人間が観念の上では、人間といふものを如何に貴いものと考へてゐるか。(たとへ自身を卑しいと悟つてゐる場合でも)全く不可解な滑稽さだ。

あらゆる美しい行為が如何に醜い動機からなされたかを彼は知つてゐた。」(『韓非抄』)「恬として既往を忘れたふりの出来る顯官連や、彼等の諂諛を見破る程に聰明ではありながら尚眞實に耳を傾ける事を嫌ふ君主が、此の男には不思議に思はれた。いや、不思議ではない。人間がさういふものは昔からいやになる程知つてはゐるのだが、それにしても其の不愉快さに變りはないのである。」(『李陵』注、文中の「男」は司馬遷)

両者の基本的な人間観や、人間を本質的に見ようとする態度は似

ている。が、そこから違う。『吃公子』では「あらゆる美しい行為」を「醜い動機」で割り切ろうとしているのに対して、司馬遷は醜い行為と共に、美しい行為を美として公平に認めている。彼が修史の中で英雄達と同化したり、李陵を弁護したりするのが、その証拠である。『李陵』全体にもそれは言い得る。蘇武の存在が、その代表である。

断片的なものから判断するのは無理はあるが、韓非子の見方は半面の人間理解でしかなかろう。美や義の存在を認めているだけ、司馬遷の方が公平であろう。司馬遷の持つ義や「男」意識の存在が、韓非子と司馬遷（延いては、『吃公子』と『李陵』）の違いの大きなものであろう。又、理論ばかり発達しても、その実行が伴わず殺された人間（韓非子）と、挫折により議論を捨てて、ひたすら書き続けた人間（司馬遷）の差が浮かぶ。韓非子が倒れた地点から司馬遷は出発したのである。

これ以外にも違いはある。韓非子の吃りによる苦惱も、司馬遷の宮刑による苦惱に比べれば軽い。「書く」事への執着も、司馬遷の方がすさまじい。司馬遷との比較だけでなく、『李陵』全体と『吃公子』を比べても、『李陵』の方が暗く重かろう。

中島は『吃公子』よりも先に、暗く厳しい世界で男たらんとして生きる李陵達を描く。こう見てくると、中島が『李陵』を先に執筆した理由が浮かび上がってくる。中島は、やはり李陵達の方に、執して公平な『李陵』の世界に共感を持った為であろう。不安に耐えながらも、実際の役に立ちたいと願う中島の心情には、『冬の時代』の生き方として、李陵達の生の方が好ましかったに違いない。彼らの生は暗いが能動的な「我」を捨てぬ力を持つ暗さである。この暗

さに中島は共感し、惹かれ、『李陵』を先に執筆したのである。これで、九月のメモに關しての三つの疑問は、ある程度解決したものとと思う。『李陵』における中島の創作意図と創作過程の關係を、簡単にまとめると次の様になろう。

中島の南洋での体験（望郷の念や孤独感）が、李陵を執筆の対象として選び、「ほんもの」志向や作家としての思いが、李陵像を拡大し、同時に司馬遷を浮上させて、彼らの内面を掘り下げて描写し、作品を平板から救い、「冬の時代」を如何に生きるかという思いや暗さが、『李陵』を『吃公子』より先に完成させたのだらう。

## 七

『李陵』執筆は、以上の様に、中島の様々な要求によっている。文学的には「ほんもの」志向であり、もっと身近には、自己の不安や理想を主人公達に投影し、一種のカタルシスを果たしていると考えられる。

それらを強く昇たす為に、作者は史実を改変し、想像力を駆使して主人公の苦惱を深め、主人公を複数化している。だが、その結果、作品に分裂感や、主人公達の生真面目さによる狭小感というマインナスも生じさせている。

この様に『李陵』の世界は長短を含みつつ、孤立や苦惱を中心に形成されている。まさに、『李陵』は中島にとって、孤立し苦悩する人間を描いた「ほんもの」の実現という面からは、一つの到達点であり「ほんもの」志向や自己の思い（不安や夢や覚悟等）の為に、作品に分裂化や狭小化を招いたという面からは、一つの通過点であった。

注

- (1) 神田秀夫氏も同じような感想を持っておられる。(「中島敦の作品を初めて読む」『現代文学講座月報9』明治書院昭37・7)
- (2) これには従来より諸説がある。例えば、李陵説、司馬遷説等である。
- (3) 本文の引用は、すべて『中島敦全集』(筑摩書房 昭51)による。中島の他の作品や書簡の引用も同様である。
- (4) これは既に勝又浩氏等が指摘されている。(勝又浩「『李陵』の構図」『日本文学』昭46・3)
- (5) 『わが西遊記』(『悟浄出世』『悟浄歎異』)の成立時期は不明であるが、大半は南洋行前に執筆されたものと推定される。
- (6) 『山月記』の成立時期は断定し難いが遅くとも昭和十六年五月までと思われる。
- (7) このメモに関して、木村東吉氏が詳しく論じておられる。参照されたい。(「『李陵』の構想」『日本文学』昭53・5)
- (8) 『山月記』『文学稿』(『文学界』昭17・2)『光と風と夢』(『文学界』昭17・5)
- (9) 『古譚』『古俗』共に、南洋行前の作品である。
- (10) 中島の姉、折原澄子氏の回想による。(「兄と私」『中島敦全集・月報一』筑摩書房昭51・3)
- (11) 庄野誠一氏宛書簡(昭和十七年八月三十一日付)による。
- (12) 戦時中の発言なので、ある程度、時局向けのものがあるかもしれないが、これを中島の本音と見た方が適當だろう。

- (13) 鈴木美江子氏宛書簡(昭和十七年十月二十一日付)参照。
- (14) 『章魚木の下で』の草稿の裏に旅行の予定が書かれている。
- (15) 中島の教え子、内田ヤスメ氏の回想による。(『教壇上の文学者』蒼丘書林 昭55・4)

〔付記〕 本稿をなすにあたって、終始御指導御教示賜った磯貝英夫先生に厚くお礼申しあげます。

(昭和五十七年十一月稿)

——呉工業高等専門学校非常勤——